

友達が頼りにしてくれたから、自分も頼っていいの
かなって

語り手 山田 裕之（高校一期生 生命保険会社）

聞き手 廣田 葉月

— 気になってたんですけど、理系やったんですよね？
理系ですよ。

— （立命館大学の）生命科学部（語り手の学部のこと）でしたよね？
よく知ってますね。

— いや、ちゃんと紙（語り手の情報が記載してある紙のこと。事前に配布された）見ました。でも生命科学あんまり関係ないようなお仕事ですよね。

— 今はまあ……。当時は、この科目がすごい得意とかじゃなくて、文系との差がすごくて。

— どうやったんですか。数学が一番得意みたいな。

— いやいやそんなに。

— そうなんですか。

— 生命科学選んだ理由なんてあれですよ。ほんと。数学は得意なんで、理工学部の数理科学科が一番向いてるはずなんです。自分の得意分野的にはね。でも男の人しかいないでしょ。

— 女の子もいるからみたいなの？

— （生命科学部が）理系の中でもあるから。

— B K C（立命館大学のびわこ草津キャンパスのこと）でしたっけ。

B K C。別にそんな大した理由ないんですけど。

— そんなんですけど。みんなそんな感じの理由だったんですかね。ちょっと、もうめっちゃ緊張してるんで、質問をいくつか考えてきたんですけど、LINE（連絡アプリ）とかも、社会人の人とメールとかLINEとかする機会っていうのがあんまりなくて、もう一通一通見て、お母さん、これってこうやって来てんけどどうしたらいいと思うとかて全部二人で考えて返して。

— すごいなと思ってる。僕らの時はそんなん、社会人の人とのやり取りなんてなかったから、それだけですすごいと思う。

— 緊張して、これめっちゃ一生懸命考えて、三十分ぐらいかけて、どうすればいいと思う？これこーしてあーしてみたいな。

— 先生とこんな感じで一対一で喋ったことあって、学校行った時に（OB訪問のこと）。でその時にこういう企画あるからってことで、応募があがってて。だから応募した。

— ありがとうございます。

— 大学卒業後について

— 私が一番気になってたのが、生命科学から今の会社に就職、金融系とかに就職した理由がすごく聞きたくて。

— いや、一個経由してるんです。生命科学部卒業した後は、サロンプスって知ってますか。

— はい、青い人間のやつ（サロンプスのCMに登場する青い人間のこと）。

— （新卒では）あの会社にいた。

— そうなんですか。

あの会社は八年いた。長いよね。

―三十歳ぐらいまで？

五年間営業して名古屋にいた。考えられないよね。名古屋。そんな言われたら行かないといけないから。そんなまだ先の話やろけど。六年後の話。で、病院まわりをした。

―病院まわり？

そう。病院で薬もらう時って薬局で薬もらうよね。内科とかで診察受けます。で処方箋もらうやんか。それを違う薬局とかに持って行って薬とりに行くやん。その病院向けの薬の営業(MRという業種)です。

―病院向けの営業なんてあるんですね。

五年たって、そこから(語り手が二十八歳の時)転勤になる。名古屋から。名古屋から東京本社に行くって言って言われた。

―ええ。めっちゃ仕事ができるってことじゃないですか。

いや、偶然営業で成果が残せたっただけ。偶然ね。じゃあ本社に行くってくださって言われて。それが実は人生の分かれ目だった。結構きつかった。

―なんか合わないみたい。ありますもんね、なんか社風とか。

ただそこでスカウトが来て、よかったら来てください。よかったら来ないですかって、面接受けてくださいってきて。本当はすごい厳しい世界なんよ。あの営業が。そういう就職活動したらわかると思う。すごい厳しい。で、厳しい会社に行くっていうイメージ。でもこの環境(本社)から逃げたかった。そっちの方を優先して、めっちゃ妻も反対した。

―その転職することには？

営業って歩合高やから。歩合高ってわかる？

―不動産みたいな。

そうそう。なんで行くの。みたいな感じに言われた。成果なかったら給料ないみたいな厳しい世界だから、なんで行くのみたいに言われたんだけど。妻も折れてくれて転職したって感じ。だから生命科学部から今の仕事にいつてる。

―でも、その自分が辛い環境からそこで折れずに、何かそこから脱却する方法を自分で見つけるっていうのはすごいことだと思います。本当にすごいと思う。

五年間の営業自体は一回やめたんですけど、(本社での事務経験を経て)営業が向いてるんだなって。

―営業じゃなかったんですか。その、本社に行ったら。

えっとね、例えばさっき青い人間って言ってたよね。CM(コマーシャルメッセージのこと)で青い人って。広告やってた。テレビ広告。CMとかチェックしてた。

―営業で成果出して本社行つたのに営業じゃないんですね。

本社営業してない。

―そうなんです、すみません全然知らなくて。

まだ高校生やからね。本社ってマーケティングとか、例えばこの商品どうやって売っていくのみたいな戦略を立てたりとか、市場調査したりとか、あと製薬会社だったら安全性を確かめるようなことがあったりとか、この薬を世の中に出しますの、って時に文言が決まって、そのホームページチェックだったりとか。

―たまたま合わなかったんですね。

ま、たまたまそういう本社系の業務が、自分だったら、こうやって、こういったパソコンとかでこう無理やって、こうやるのは無理だったわ

けです。性格的に。それを気付けるのもすごいです。二年かかった。二年半いたから、立命館守山と一緒の期間ぐらいその本社にいたから、そこまでは一応、もしかしたら、自分がただ単に覚えが遅いだけで、もしかしたら覚えれるかもしれない、自分はまだ慣れなかっただけで、四年とかいたらもしかしたら慣れたかもしれないって思ってたけど、自分は一切慣れなかったから。これは無理だって思ってたね。だからちよつとね、間端折ってた。

—全然もうそんな気にしないでください。

—そう見えるよね、なんで生命科学なのに金融なんだみたいな。

—大人になるのが怖くなってきた。

—いやいやいや。楽しい。それこそ直近やからあれやけど子供産まれたりとか。

—どういう風になるとかってありますか。

結婚で多分人生変わるかな。それまでって、ある程度は。多分独身の時間って。もしかしたらすぐ就職してすぐに結婚するかもしれないけど、その期間でずっと独身の時間がある。その時多分自分のためだけに動くやん。でもそれが妻ができて、妻のために働く、でそこにプラス最近子供もできたから、妻と子供のために働くみたいな。独身の時は売り上げゼロでも貯金あればなんとかなるっしょみたいな考え方だったけど、今はそういうわけにはいかない。理由があれば頑張れる。

—素敵なお父さんですね。

—そんなことないよ。それまではね、自分勝手やったし、それこそ立守の時とかも。

高校時代について

—まあ高校生ですし。

—どうやってモテようかなとかしか考えてなかった、当時は。

—モテました？

—モテてないよそんなん。

—ほんまですか？

—いやでもそんなそんなん。それこそ来週会うバスケット部のキャプテンとか。キャプテン副キャプテンあたりはまあモテてたかな。

—なんでバスケット部に入ったんですか？

—すごい恥ずかしい話で、友達の作り方がわからなくて、どうやって喋ったらいいかわかんなかった。小学校の時。友達の作り方がよくわからん。すごい、わからなかった。友達の作り方が。自分から喋るとかできひんかった。向こうから喋りかけられたら喋れるんやけど。

—自分から話しかけて何かを喋るっていうことが苦手やったんですか。

—そう。だから、仲いい友達とかが入るから、別にやりたくないけど入ったっていうのが最初。その友達失ったらどうしようって、中一で初めてバスケット始めた。無事中三まで終わって、部活のおかげである程度こうやってコミュニケーションとかも取れるようになってきた。

—で、なんでバスケットっていう話なんですけど、能登で勉強合宿みたいなのがあって。四泊五日の。めちやくちや仲良くなった。その（勉強合宿で一緒にあった）メンバーで。全員その時にちよつとぐらい会話するやん。夜の寝る前とかに。自分バスケット部とか言っちゃって。これも奇跡やけど、六、七人ともと全員バスケット部やって。何人かこの中で立守と一緒にあって。もちろんバスケット部入るやんなみたい。あとは、人間性とかそういうところもあるんやけど。バスケット部と、あともう一人いるんだけど、その二人が、やっぱその二人と離れたくなかった。やめる

とやっぱね、気まずい。部活やめるとちよつと距離感が（できる）。これは今やったらそんなどうでもいい話なんやけど。いや、当時高校生からすると重大なことですよ。辞めた側が裏切った感が出ちゃう。当時そういう風に見えちゃう。バスケ部で喋ってたりしたらなんか言われるんちゃうかみたいな。いじめじゃないけどね。なんか感覚的に距離がある。やっぱりそれになるのが嫌やっただけ。いややっただから、やったらきつい練習耐えた方がいいやんって。自分にはその立場になるほどの強さがなくて、自分って弱いから、いやだからそっちで我慢するしかなかった。やめたかった。

—私はそれに耐えきれなくて辞めちゃった側なので、そこで耐えられるってすごいと。

いや、やめようと（はした）。やめるっていう勇気がない。一日でも早く引退したかった。ずっと数えてた。なんか、高三になってから結構感動した。

—もうあと何日でやめれるみたいな。ありますよね。強豪とか強いとかやったらね。

なんか当時バスケちよつと嫌いやった。

—厳しすぎて？

言い過ぎた。まあでも、そんな得意じゃないのよ。多分。走るのとかは多分得意なんやけど、スポーツでも球技が苦手なんよ。球技音痴なんよ。そんな立場だから、下から、ベンチのメンバーから絶対結構悪口言われても。当時、なんか一回ね、すごい練習きつくって。練習がきつくって、さらにガッて自分が言われた日が（あって）、なんか泣いてた日があつて。それでな、言われたことある。（レギュラーで）やれてるんやったらいいやんみたいな。

—それは嫌ですね。

いろいろ経験するよねって。でもやめる方がすごいと思う。決断力がある。決断力がなかったから、続けてた。

—いや、すいません。私、辞めた時、とりあえず辛くて、もうとにかく辛くて、もう辞めるか、このまま死ぬかぐらいで悩んでました。

メンタルね、やられる人もいるからさ。

—そこですごく、メンタルだীব強くなつたと思うし。

そっちの方が強いと思うんで、自分が弱いからできなかったっていう。

—でも、そこでできなくても、三十歳の時に転職されて、そこで折れなかったっていうのがあるから、すごいと思います。

きつかったけど、その時は嫌やっただけど、今全然後悔してないし。最後まで辞めずにいた。今、お酒飲むとかいう機会あったらさ、全部その時（部活の時）の話。きつかったなみたいな、みたいな。一回立守のバスケ部で集まったりすんねんけど、毎回同じ話やから、嫁からも呆れられてる。あんたその話しかせえへんって。

—もうお決まりになつてる感じなんですか。酒飲んだらあの日のあれみたいな？

そう。もう一回同じやねんけど、もう一回盛り上がる。そうそうとかって、そういうのもあるしで。なんかね、クサイかもしれんけど、そういうかけがえのない仲間っていうのができた。

—辛くて、なんか後から思い出して笑えるようなことになるっていうのは、すごい大事ですよ。

きつい時ってできない。うん、当時はそれできなかった。バスケ部の当時きつい苦労はできてない。

―何かを乗り越えてこそですよね。

そう。うん、決意なくてやめなかったら、後でよかったってやつです。そういうかけがえのない仲間ができたから、自分のその身の上の話をできたっていう。

―そうですね。

家族のことについて

実は兄は今日来てなくて。騒いじゃうから。だから、自分の父は（語り手はインタビュ―前に法事があつて）実は法事来てんのやけど、法事までは参加して、その後の食事は参加してない。そう、こういう場合は知的障害とか自閉症って、大体は、静かにできない。電車の中でたまにいない？　こんな人とか、歩いてたらたまにこんな感じで歩いてる人、ちよつとブツブツなんか言ってるとか。（兄が）そういうタイプで。言えなかった。

―言いづらいですよね。

立命館守山とか、高校受験したとこ、全部自分の家から距離があるんです。（家から遠い高校を選んだ）理由の一つで、兄のこと、言わなくていいとこに来たかった。ある程度の偏差値で、自分の家からちよつと距離のあるとこに行きたかったっていう。中学の時ってみんな自分の兄のこと知ってるから。お前の兄ちゃんこうやもんなみたいな。（感じで）やっぱいじられたり、そういう立場で兄弟ってなると隠したくなる。どうやっても隠したくなる。でも（立命館）守山って別に一人っ子ですって言ってもバレないじゃんぐらいのレベルやん、距離感的に。で、同じ中学の人一人もいないから。それで、でも一人っ子やねんって言ったとしてもさあ、そうなんやってなるし。あと高一とか高二にして

は、多分、自分で言うのもなんやけど、大人びてた。兄がいるから、多分しつかりしないといけないって。それもあつて、立守行つて弾けちゃった。初めて自分出せるって。多分、バスケットかも自信がついてたから、レギュラーになれた。勉強も中学の時より（成績が）全然高かったし、全部上手く行つてた。兄のことを隠した方がいいんやって思っちゃった。でも、親しい友達だけには（兄のことを）言つてた。家族のことを隠すって結構辛くて。

―打ち明ける時って、怖いなとかって思うことってありましたか。

いや、彼（キャプテン）やったらいいって思った。怖さはあつたよ。けど（ここが）立守のいいとこで価値観が合う。（中学の時とは違って）逆に心配してくれる。バスケのキャプテンで大学になったらドライブとかもしてたんやけど。ドライブとかしてる時に、二人になった時とかにお前将来どうすんのっていつてくれたり。自分のことでも考えてくれたり。（兄のことを）言つたのは、間違つてなかったなって。

―大学って高校とか中学みたいに同じ物事一つに向かつて一緒に頑張るみたいなイメージがあんまりないんですけど。どうやって友達作るんですか。

自分の時どうやったかな。（大学では）ちよつとなんか喋ったりさ、楽しいなって思い始めた四人組ができた。けどその友達には誰にも言っていない。

―その人の関係性によってありますよね。話すこと、話せないことって。

隠すことに慣れちゃつたの。なんかこの今回の立守のインタビュ―みたいなんに、三十歳の時に依頼されてたら、多分そのこと（インタビュ―前に配布された紙に兄のことを）書いてないと思う。

—私が言ったら、ちよつとニュアンスが違ってくるかもしれないですけど、いる、存在するっていうのと、自分の中で受け入れられるっていうのはまたちよつと違うじゃないですか。それが今やったらちゃんと受け入れられてる。受け入れられたっていうか。

—そうそう、受け入れたってことなんかな。そこまでは隠してない。

—受け入れられたってほんとすごいこと。

—いやいや、家族を隠すって結構ひどいことしてる。

—そうですか？でもそこまでひどいことじゃないと私は思います。

—そう言ってもらえたらこつちも心が軽いね。言えるようになったのも妻のおかげかな。これも結婚して良かったって思えることの一つなんやけど。転職してから（兄のことを）言えるようになったトリガーっていうか。その大きな割合を占めるのが妻。

—ほんまにいい奥さん。

（兄のことを）なんで隠してんの。不思議じゃない、みたいな。最初はずっと隠してたから、やっぱ言うとか、もしかしたら別れられちゃうかもしれない恐怖心なんかがあったんだけど、全然気にしないでいてくれて、向こうの親御さんも結婚する際に色々と言ったけど、全然受け入れてくれて。言うことって恥ずかしくないんだっていうのが大きくなつて。

—そうやって意識が変わるのっていいことだと思います。

—出合いがなければもつと変わってたって、これはたればの話やけど、陸上選んでたら変わってたかもしれないし。

—ちよつとずつの積み重ねが今に繋がってる感じですね。自分の家族っていう大事な部分を打ち明けられる友達だなんて思った瞬間とかってありますか。

これ難しいね。

—話した時になんかころって言っちゃったのか、それとも言おうと思つて言っちゃったのか。

—やっぱ一緒にずっといるわけや。週七日一緒にいるからね。授業も一緒だし、土日はもちろん一緒に部活してるからずっと一緒にいるやんかってなって。（兄のことを打ち明ける）一つのきっかけは自分家に遊びに来るってなった時。否応なく言わないといけないようなシチュエーションになったから。っていうのも、これで（自分の家に遊びに来るのを）断る理由がないよなって思つて、自分の家に来られたら困るみたいな風に言うの、なんか変やん。

—あと当時、やっぱ自分も中学の時に、さっき言つてたみたいに僕自信のない人やつたから、勉強もそんなできない、別にスポーツもそんなにできない。それで、中学卒業して、立守も入りましたってなって、部活出来るようになり、勉強もある程度テスト点数取れるようになった。そしたらキャプテンに勉強教えてやって言われて。（今まで）頼りにされることなんかなかったのに頼ってくれて。それがすごい嬉しかった。それが多分人生で初めて。その友達が色々頼りにしてくれたから、自分もじゃあ頼つていいのかなって思いました。お互い頼られて頼る関係性ができたから。高一の時はキャプテン嫌いやったもん。

—なんでですか。

—当時は推薦で入ってきたから、バスケも上手いし。下に見られてたの。ミスとかしたら、おい今のミスなんやねんみたいな。だからなんやねんこいつって思つた。そう。けど、やっぱりなんかどんどん、こうね、練習がきつくなつてから、立場が変わっていつて。

—きつくなつてよかった部分かもしれないですね。

ハードで嫌やったけど、めっちゃきついし、めっちゃ嫌やったけど、
そうやって。友情じゃないけど、それが。はい。きつかけかな。
—ありがとうございます。一旦録音止めますね。

感想

お話を聞けてとても良かったと思った。語り手の方と自分は今まで経験
してきたことがとても似ていて、共感しながらお話を聞くことができ
た。自分が今まで生きてきた中で、同じ経験をしてきながらも、視点の
違う考え方を共有していただくことができた。

左..聞き手 廣田 葉月

右..語り手 山田 裕之さん

